

令和8年度第1回岡山県スポーツ推進審議会 会議録

【開催概要】

- 日 時 令和8年9月1日（火） 10:00～11:45
- 会 場 岡山県庁9階大会議室（岡山市北区内山下二丁目4番6号）
- 出席者 <委員（会長以外：五十音順）>
三村会長、井上委員、上田委員、小林委員、泉水委員、中尾委員、二宮委員、信谷委員、松井委員、三宅委員、山口委員、山本委員
※委員15人中、12人の出席であり、本審議会は成立している。
- <事務局>
環境文化部：國重環境文化部長
宗田文化スポーツ振興監
藤原担当課長（おかやまマラソン担当）
松本スポーツ振興課長
子ども・福祉部：藤本障害福祉課総括参事
教 育 庁：片岡保健体育課長

1 開 会

2 挨拶

（環境文化部長）

- ・ 今年度は、昨年度のインターハイに引き続き、8月17日から24日にかけて、全国中学校体育大会（全中）が中国ブロックで開催され、本県では、岡山市、倉敷市、総社市の3市で、ハンドボールなど4競技が行われ、中学生アスリートが熱戦を繰り広げたところである。
- ・ 先月、ゴルフの全英女子オープンにおいて、岡山市出身の桑木志帆選手が優勝し、本県に明るい話題を届けたが、今月19日からは、アジア最大のスポーツの祭典「アジア競技大会」が32年ぶりに日本国内で開催され、本県ゆかりの選手の活躍が大いに期待されているところでもある。
- ・ 岡山県ゆかりの選手が世界で活躍していくことは、スポーツ・競技の枠を超え、岡山でスポーツに関わる全ての人々に大きな喜びと感動を与えるとともに、スポーツの持つ力で岡山を盛り上げていくと考えており、より一層スポーツの振興に取り組んでまいりたい。
- ・ 本日は、第2次岡山県スポーツ推進計画の目標に掲げる「『スポーツ立県おかやま』の発展」を目指し、計画の進捗状況についてお諮りするので、忌憚のない意見をいただきたい。

3 議 事 資料 1

○第2次岡山県スポーツ推進計画の進捗状況（2025年度実績）について

■事務局説明（スポーツ振興課長）

資料に沿って説明

■質疑等

（※資料に沿ってまとめているため、必ずしも発言順ではない。）

① 基本施策 I

多様な主体におけるライフステージに応じた運動・スポーツ活動の機会創出
（委員）

- ・ 小学生、中学生ともに「運動やスポーツをすることが好きな児童生徒数の割合」が増加している一方で、「1週間の総運動時間数が60分未満の児童生徒の割合」も増加している。
- ・ スポーツを好きにはなっているものの、それが実際の運動習慣の向上には結びついていないということか。

（保健体育課長）

- ・ 運動やスポーツをすることが好きな児童生徒数の割合の増加や新体力テストの数値向上は見られるものの、運動習慣化に定着させることが課題であると感じており、施策の定着にはまだ至っていないのが現状である。
- ・ 県としては、まずは運動が好きな児童生徒を増やし、それが運動習慣化および体力の向上につながるという考えのもと施策を引き続き展開してまいりたい。

（委員）

- ・ 「1週間の総運動時間数が60分未満の児童生徒の割合」は令和10年度の目標値の達成は、難しいと考えている。
- ・ 子どもへの取組だけでなく、保護者の存在も大きく関係してくるため、保護者世代に向けたアプローチがあると、より効果的な数値の伸びにつながるのではないかと。
- ・ 例えば、親子で協力して取り組める施策があると非常に効果的だと思う。

（保健体育課長）

- ・ 生涯スポーツ・生涯教育の観点では、保健体育課のほか教育委員会に生涯学習課があるため、そちらとも連携を図っている。
- ・ 例えば、夏休みに「家族で体力を高めよう」といった内容の宿題を出すなどの取組を行っている学校もある。いただいた意見を参考に、今後も施策を進めてまいりたい。

(委員)

- ・ 学校現場では、体育の授業時数自体は変わらず実施されており、運動が苦手な生徒も楽しめるような工夫が授業内でなされている。
- ・ 一方で、部活動ガイドラインが制定されて以降、中学校では、週の活動時間が11時間程度といった制限が設けられ、これまで頻繁に活動していた生徒が、部活動がない日等に自発的に別で運動を行うということが、なかなか難しくなっているのではないかと感じている。
- ・ その結果、運動が好きな生徒は増えているが、週60分未満の生徒を減らすという段階までには至っていないのが現状かと思われる。

(委員)

- ・ 学校現場では、体育の授業は以前に比べてかなり工夫されており、運動好きな子どもが増えている実感がある。
- ・ 一方で、教員の働き方改革の流れから、休み時間等に行っていた全校的なイベントや活動を縮小・削減している傾向があり、子供たちが運動する絶対的な時間が減少していると感じている。
- ・ 猛暑の日は休み時間に体育館を解放するなど遊べる環境を整える取組を県内に広めているところである。
- ・ イベントが減った分、環境面を整えることで、体育授業で芽生えた運動が好きという感覚を他場面で発揮できる工夫が必要だと感じている。

(委員)

- ・ 猛暑日の体育館解放に関連して暑さ対策を伺う。避難所に指定されている学校体育館へのエアコン設置について、政府が2031年までに目標を前倒しするとの報道があった。プールや体育館の環境整備について、現場ではどのように受け止められているか。

(委員)

- ・ 学校現場では、夏の暑さによりプールの授業も取りやめる日があったり、働き方改革により記録会が廃止になったりしている。
- ・ グラウンドも使えない中、暑さ指数等の数値を計測しながら体育館の開放を行っている。
- ・ 遊びたい子どもたちのために体育館を開放することは必要であり、同時にエアコンの早期設置を切望している。
- ・ 現状のままでは体育館でも熱中症のリスクがあるため、早期の環境整備が必要である。

(委員)

- ・ 基本政策Ⅰに示されている数値は、県全体の平均数値かと思うが、県南と県北では子どもを取り巻くスポーツ環境が大きく異なる。
- ・ 県北では著しい人口減少・少子化が進んでおり、野球やバレーボールと

いったスポーツ少年団のチーム維持すら困難な状況である。

- ・ 全県一律の目標数値（令和 10 年度目標）に対して、少し違和感を覚えるが、県南・県北でデータを分けることは可能か。

（保健体育課長）

- ・ このデータは「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の集計結果に基づいており、集計し直すことで県南・県北別の数値算出は可能であるが、公表値としては全県一律のデータを用いている。

（委員）

- ・ 子どもが激減している県北の実情も考慮して施策を検討していただきたい。

（委員）

- ・ 「1 週間の総運動時間 60 分未満」の「60 分」には、学校の業間休みなども含まれるのか。

（保健体育課長）

- ・ 授業時間以外の運動時間のため、業間休みや昼休みに、外で鬼ごっこなどの運動的な遊びをした時間はカウントされる。

（委員）

- ・ 週 5 日間の登校日として、1 日あたりトータル 12 分程度外で遊べば、「60 分以上」になると思うが、それを考えても 60 分未満の児童生徒がこれほど多いということか。

（保健体育課長）

- ・ アンケート調査のため、児童生徒への指示の伝わり方によっては、業間休みの遊びが正しく記入されていない可能性もある。
- ・ 基本的には運動遊びも含まれるので、正しい理解を促すとともに、体育授業の充実を図り、そこで得た楽しさを休み時間や放課後の運動へと広げていけるよう取り組んでまいりたい。

（委員）

- ・ 学校内での取組はもちろん重要だが、小・中学校を卒業した後の継続性（習慣化）が重要である。
- ・ 学校外の時間での運動環境づくりについて、地域の傾向を踏まえた課題分析を検討いただきたい。

（委員）

- ・ 「スポーツパスウェイ事業」の進捗状況について教えてほしい。

（スポーツ振興課長）

- ・ 今年度、IPU（環太平洋大学）の測定プログラム・器具等を活用し、体力テストとは異なる観点から子どもたちの「得意な能力」や「伸びしろ」を測定するイベントを実施しており、7 月末に第 1 回を開催したところ、定員 240 名に対し、応募で満員となった。

- ・ 自分の得意分野を知り、半年間の努力を経てどう変化するかを測定するため、半年後に第2回の測定を予定している。
- ・ スポーツパスウェイ事業は今年度が初年度であるため、第2回測定終了後に事業全体を総括し、本審議会にて報告したい。

②基本施策Ⅱ

アスリートの育成と持続可能な指導・支援システムの構築

(委員)

- ・ 基本施策Ⅱ-2「アスリート育成パスウェイの構築」の総合評価が2.0と前年度より低下している理由は何か。

(スポーツ振興課長)

- ・ 「アスリート育成パスウェイの構築」については、「岡山県アスリート就職支援事業」による県内就職内定者（マッチング）の実績に関するものである。令和6年度は3名のマッチング実績があったが、令和7年度はマッチングが難航し、内定数が1名にとどまったことから、評価を2.0としているところである。
- ・ 指導者の育成に係る課題については、岡山県スポーツ協会と連携を図りながら、今後の施策を考えてまいりたい。

(委員)

- ・ 基本施策Ⅱ-3「指導者の育成・資質向上」の総合評価が4.0と評価が上がっているが、これは「日本スポーツ協会公認スポーツ指導者登録数」の増加だけでなく、どのような施策によって指導者の資質の向上が図られたと評価したのか。

(スポーツ振興課長)

- ・ 公認スポーツ指導者の登録者数が増加していることに加え、県の施策として各競技団体における若手指導者の専門研修や資格取得に対する支援を行っており、これらが順調に推移していることから、前年同様「4.0」の評価としている。

③基本施策Ⅲ

スポーツを通じたともに生き豊かさが実感できる地域の創造

(委員)

- ・ 「総合型地域スポーツクラブと連携・協働している学校の割合」の目標が50%とされている。
- ・ 文部科学省が総合型クラブの設立を推進して約30年が経過し、部活動の地域展開等でも期待されているが、自立して十分に機能しているクラブは限定的である。岡山県内には約40クラブ存在しているが、国の登録基準を満たしているのは14クラブ程度であり、世代交代や運営面で厳しい課題を抱えている。

- ・ 総合型地域スポーツクラブの連携をさらに活性化させるための県の見解を教えてください。

(スポーツ振興課長)

- ・ 総合型地域スポーツクラブは、地域に根ざした子供たちのスポーツ・文化芸術活動の受け皿として大変期待されている。
- ・ 課題としては「人材」と「財源」が挙げられる。設立初期の補助金終了後、いかに自走できるかが鍵であると考えている。
- ・ 県としても、県スポーツ協会内に事務局を置き、各クラブの課題解決や学校連携に向けた支援を継続してまいりたい。

4 フリーディスカッション 資料 2 テーマ「幼少期からの運動習慣づくりについて」

■事務局説明（スポーツ振興課長）

資料に沿って説明

■フリーディスカッション

(委員)

- ・ 子どもたちの運動能力が年々低下していると強く実感している。
- ・ 以前は、幼少期では体の使い方にそこまで大きな差は見られなかったが、最近では、幼児期から運動能力や体の使い方に明確な差が出始めている。
- ・ 小学校、中学校での対策も重要だが、幼少期から多様な身体運動を経験させることが不可欠である。
- ・ 運動能力の向上のためには、得意分野を見つけて褒め、認められる経験を通じて、自信を深めさせることが大切だと考えている。

(委員)

- ・ 集団の中では体がうまく動かせず消極的になる子どもでも、家庭内やリラックスした環境ではスムーズに体を動かせたり、自己表現ができたりするケースが多くある。
- ・ そのため、学校の先生と保護者との連携が非常に重要だと感じており、保護者が「家ではこんなふうに動いている」などといった家庭での様子を先生方に情報共有することも大切である。
- ・ また、保護者自身に時間的・精神的なゆとりがないと、子どもと一緒に運動することができないため、家庭や地域、社会全体でゆとりを持ち、親子で運動を楽しむ環境づくりや声かけを行っていくことが必要だと考えている。

(委員)

- ・ パラスポーツの観点では、肢体不自由などの障害がある幼少期の子どもたちは、運動というよりもリハビリテーションが中心となり、辛くて泣いてしまうことが多い。
- ・ そのため、理学療法士や家族と一緒に楽しみながら ADL（日常生活動作）・QOL（生活の質）を高めていくアプローチを行っている。
- ・ また、中学校段階からパラスポーツに取り組む子どもが増えてくるが、地域でのレクリエーションスポーツなどを含め、好きなこと・得意なことが見つかり、障害のある子どもは大きく伸びると考えている。

(委員)

- ・ 幼少期からの運動習慣を議論するにあたり、まず運動環境の整備状況を直視すべきではないか。
- ・ 県有スポーツ施設や小・中学校体育館のエアコン設置率は現在どうなっているのか。
- ・ 酷暑・猛暑が続く中、環境が整っていないければ「運動習慣をつけろ」と言っても限界があるため、県として現在のエアコン設置率等をどう把握し、整備を進めようとしているのか伺いたい。

(保健体育課長)

- ・ 報道等による市町村立小中学校体育館のエアコン設置率は、市町村によって大きな差がある。
- ・ 老朽化対策や校舎・体育館の耐震化工事など、優先順位や予算上の制約があり、一気に全校へ設置するのは難しいのが現状である。
- ・ ただし、近年の災害（避難所機能）や熱中症対策の観点から、今後設置が進んでいくものと認識している。

(委員)

- ・ 酷暑が続く時代において環境整備を行わなければ、子どもたちの運動習慣化は不可能である。
- ・ 公共・民間の既存施設を柔軟に活用するなど、行政が積極的なリーダーシップを発揮して環境整備を進めるべきである。

(委員)

- ・ 幼少期の子どもたちにとって最も大きな影響力を持つのは保護者である。
- ・ 保護者や家族（祖父母等）と一緒に「体を動かすのは楽しい」と思えるような大人の働きかけや仕組みづくりを進めていくことが極めて重要である。
- ・ 「できた」という成功体験や、大人が褒め、認める声かけが子どもの自信につながると考えている。

(委員)

- ・ 子どもが体を動かす最初のきっかけは家庭環境だと考える。
- ・ 保護者がきっかけ作りをしなければ、子どもは自発的に身体を動かさないで、家でのちょっとした遊びなど、1日5分でも親子で体を動かす習慣がスタートラインになると思う。
- ・ ただ、現代はひとり親家庭や共働き家庭も多く、スポーツ施設に通わせる余裕がない家庭もある。そのため、県営グラウンドのような公共施設をより使いやすく、開放的な場所にしていく必要があると考える。
- ・ 県営グラウンドのサブグラウンドなどは、猛暑の中で中高生やクラブチームが利用する際、日陰がある待機場所がなく酷暑にさらされているため、競技力の向上や安全な利用のためにも、日よけの設置など「使い勝手の良い環境整備」をぜひ進めていただきたい。

(委員)

- ・ 小学校では、水泳記録会や陸上記録会などが削減される中、子どもたちの運動会の機会を守るには環境設定と多様な遊びの紹介が欠かせない。
- ・ 体育館への用具の配置遊具設置などに加え、子どもが家庭でできる手軽な運動遊びを配布文書等で保護者に紹介し、家庭へ広げるアプローチを行っている。

(委員)

- ・ 社会における「スポーツの価値」が依然低く見積もられていると感じる。
- ・ 人口減少が進む中、全施設に完璧なハード整備を行うのは困難であるため、既存の公共施設・学校施設の有効活用を徹底すべきである。
- ・ 特に学校施設の地域開放においては、夜間や休日の鍵の受渡方法に大きなハードルがあり、未だに、平日の昼間に事務室まで鍵を取りに行き、使用後に返却するといったアナログな運用を行っている施設がある。
- ・ ダイヤルロックやスマートロック、キーボックスの導入など、時代に合わせた開放システムの簡素化が必要だと思う。
- ・ 乳幼児期のアプローチにおいては、歩行前の赤ちゃんの「発達段階に応じた手足の使い方」を保護者に伝える講座や、「アクティブチャイルドプログラム」を授業参観・親子参観で実施する取組を行っている。
- ・ 特別な場所に行かなくても、家庭で5分、親子でスキンシップを取りながら遊ぶだけで、子どもは素晴らしい笑顔を見せ、運動好きになる。こうしたプログラムを指導できる人材育成と環境づくりを、ぜひ県として推進していただきたい。

(保健体育課長)

- ・ 委員から指摘があった県立学校体育館の地域開放における鍵の管理につ

いては、現在、改善に取り組んでいるところである。

- ・ 既にキーボックス等を設置し、事務室に入ることなく鍵の受け渡しができる仕組みを導入している学校も増えているが、まだ不便が生じている施設については詳細を伺い、利用しやすい環境整備を進めてまいりたい。

5 報告事項 **資料3**

- (1) 世界へ羽ばたくアスリート支援事業における令和8年度強化指定選手について

■事務局説明（スポーツ振興課長）

資料に沿って説明

- (2) 岡山県県民栄誉賞について

■事務局説明（スポーツ振興課長）

資料に沿って説明

- (3) 岡山県スポーツ特別顕賞について

■事務局説明（スポーツ振興課長）

資料に沿って説明

- (4) おかやまマラソンについて

■事務局説明（おかやまマラソン担当課長）

資料に沿って説明

6 閉 会

(文化スポーツ振興監)

- ・ 長時間にわたる審議に感謝する。
- ・ 第2次岡山県スポーツ推進計画では、「誰もがともに『する』『みる』『ささえる』スポーツで明るい笑顔の生き生き岡山」をスローガンに掲げており、スポーツが有する価値を基本にして、引き続きスポーツを通じた地域の活性化につなげてまいりたい。
- ・ 本日いただいた貴重な意見を生かしながら、今後の施策に取り組んでまいりたい。